

松本厚治・服部民夫編著

『韓国経済の解剖——先進国移行論は正しかったのか——』

文真堂 2001年 x+251ページ

たに うら たか お
谷 浦 孝 雄

本書は経済学、政治学、社会学などの社会科学系だけでなく、工学、あるいは官庁エコノミストなど幅広い分野の専門家による韓国経済の現状分析である。1997年のアジアの通貨危機を契機として、韓国経済の問題点を扱った多数の論文が著された。それらは当然ながら危機発生の原因となった国際金融との関わりを主な対象とした。本書も「1997年から98年にかけて生じた経済危機を手がかりとして」いるが、「長期的な観点から韓国の経済社会を構造的にとらえなおそうとした」ところに主眼点を置いており、他書と一味も二味も異なるものとなっている。

全編は10章から構成されており、前の7章で経済危機の背景となったと思われる実物経済上の構造的問題を様々な視点から論じ、後の3章で危機を契機に取り組みされた構造改革のうち、財閥、労使関係、金融部門についてこれまでの経緯を明らかにしている。全体としては本書の副題「先進国移行論は正しかったのか」から推測されるように、韓国経済の「実力」に対する辛口の評価になっている。

編者によれば、各章ごとの執筆者の見解を特に調整することはしなかったが、「結果的に相似た方向性をもつもの」となり、「各分野の専門家が産業技術の問題に期せずして注意を向けた」としている。服部民夫は、「第1章 組立型工業化の形成と挫折」およびそれをさらに敷衍した「第5章 技術・技能節約的發展の特異性」において、機械工業の中核的部分である精密部品加工産業あるいはその技術の蓄積に決定的な脆弱性を持っているということが、韓国産業の対外依存の持続と逆説的ながら「圧縮的發展」の要因であると指摘している。松本厚治は、韓国がこのように「先進工業国の欠かせない要素である技術の自立的な発展基盤」を形成できなかった背景を、

韓国の産業政策のバックボーンに「日本モデル」をそのまま模写できるという信念が深く絡み付いていたせいであるという、思い切った説を展開している（「第2章 韓国の経済発展と『日本モデル』」）。

伊藤亜人「第4章 産業化の制約要因としての儒教」は、韓国の儒教に含まれる「物・職業軽視」の伝統が現代に連なっていると指摘し、服部や松本の主張を補強している。

川上桃子「第6章 台湾・韓国経済における変化への対応能力」は、台湾の中小企業主導対韓国の財閥主導という定式化された相異を確認した上で、生産組織の柔軟性の視点から外的変化への対応能力の評価へと一步踏み込んでいる。また、ラ米経済の専門家である佐野誠の「第7章 韓国経済のアルゼンチン化？」は、ルイス的な転換点を通過した後の韓国の労使関係が労働市場での価格メカニズムを抑圧する傾向を持っており、さらに金融の自由化が金融システムの脆弱性を深めたという点で、かつてアルゼンチンが経験した衰退への道に韓国も迷い込む可能性があるという、示唆に富む指摘を行っている。

各論文とも明快な主張が込められており、示唆される所も少なくないがやや単純化しすぎの感もくはない。一方、伊藤誼の「第3章 韓国産業技術の問題点」には「きめの細かさ」や「気配り」の欠如など日本人技術者特有(?)の俗な表現で韓国の工作機械技術が評価されており、門外漢にはかえって分かりにくくなっている。

ひとつだけコメントしておきたい。「技術の自立的な発展基盤」に関していえば、本書の厳しい評価とは裏腹に、韓国はアジアの他の諸国のなかではもっとも力を入れてきたのではないか。服部が言うように、今日の発展途上国は「技術・熟練蓄積的發展」をするには時期的、時間的にきわめて厳しい環境の下に置かれている。韓国は「技術節約を選択」したのではなく、「技術移転で代替」しようとしたために慢性的な経常赤字とその結果として対外債務の累積を招いたのである。この選択は必然であり、やはりファイナンスの仕方に不適切な面があったのではないか、というのが評者の見方である。

(新潟大学経済学部教授)